

バーバ・ムクターナンダの物語

スワミ・ヴァースデーヴァーナンダ

1970年代の中頃、バーバが2回目の世界ツアーでアメリカ合衆国に来た時、私は彼の存在に魅了された大勢の若者のうちの一人でした。当時、真のグルについて、私たちの多くはほとんど理解が無く、多くの先入観を持っていました。そのような精神の師からどのように学ぶか、そして師にどのように仕えるかを私たちにいろいろな方法で教えてくれたのは、バーバ自身でした。

1974年10月6日、私はバーバがニューヨーク市に到着した時に行った最初のサツァングに参加し、その後同じ週に、バーバが東海岸で行った最初のシャクティパート・インテンシヴに参加することができました。バーバが別の都市へ移動した後、私はニューヨークにとどまり、教師の仕事の続けながら、新たに知った瞑想とチャンティングの実践を続け、もう一度バーバと一緒に過ごせる時をずっと待ち焦がれていました。

ある晩、瞑想していると、私は非常に美しい青い光の玉の中に立っているバーバのビジョンを見ました。私はなぜか、その玉の中に入ることができ、バーバの足の上に自分の頭を付けました。そのビジョンは、ほんの一瞬のものでした。しかし、ビジョンは偉大な安らかさを伴っていたので、それ以後、バーバのいる場所ならどこへでも行きたい、そしてあのビジョンを実現したいと熱望するようになりました。

ついに、1975年の夏、私はカリフォルニア州オークランドに行き、その年にバーバが設立したシッダ・ヨーガ・アーシュラムでセーヴァーをささげることができました。到着した時から、私はバーバの足に自分の頭を付ける機会を探していました。

私は、グルの足の上に頭を付けることを示唆したインドの聖人の歌を幾つか聞いたことがありました。でも、だからと言ってさっさとバーバのところに行ってただできるようなことではありません。私はどうやったらそれを実現できるか、分かりませんでした。そんな中、バーバとのサツァングやチャンティングの時間には、私はできる限り、瞑想ホールの中央の通路沿いに座るようにしました。そして、バーバがホールに入ってくる時や出ていく時に、私の前を通り過ぎるとすぐその場所に、自分の頭を付けたものでした。それが精一杯でした。

そしてある晩、バーバがホールを出る時にバーバの足が踏んだ場所を見て、そこに私が頭を付けていると、近くの人たちが笑い始めました。私はすぐに見上げました。バーバが真ん前に立っていたのです。バーバは戻って来ると、すぐそこに立ち、腰に手を当てて、いたずらっぽく私を見下ろしていました。私は、「今がチャンスだ！」と思いました。しかし、バーバの足に頭を付けようと動いた瞬間、彼はあっという間に向きを変えて歩いて行ってしまいました。

自分が滑稽に見えただろうことは分かりました。それでも、バーバが私の望みに気づいていることを知って、私は慰められました。

数日後、バーバとの「シュリー・グル・ギター」の朗唱の時、私はバーバの椅子のすぐそばにたまたま座ることになりました。数節を歌った後で、私はとても強く内側に引き込まれるのを感じました。私は力の限り、我慢しました。スワーデャーヤの朗唱をする間、私たちはそこにいて集中を保つべきだとバーバはとても明確にしていました。しかしながら、この日の朝の私は起きていられませんでした。そしてバーバの真ん前で、私の頭は垂れ、意識は無くなりました。

たくさんの節が過ぎてから、私は目を開けました。私はそれまで知らなかった意識の状態 —— 完全に静寂で、さえ渡っている状態 —— にありました。私のマインドはすっかり澄んで安らかでした。私がバーバを見上げると、彼は私を真っすぐに見ていました。バーバと目が合うと、私のマインドに静かに考えが生じました。「バーバ、これがあなたの足に頭を付けることです。この状態が」。すると、バーバはうなずき肯定しました。

あの日、バーバが私に与えてくれた、さえ渡った状態は、私が何度も繰り返し体験することができるもので、私がこの世界のどこにしようとも、グルの足の上に頭を載せていることができるのだと、私は理解するようになりました。



© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。